

陳舜臣さんを語る会通信

NO.1 Mar. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年3月1日

「陳舜臣さんを語る会通信」の創刊号です。「通信」では、陳舜臣さんと陳舜臣作品に関すること及びその周辺を広く取り上げるつもりです。「周辺」については、編集委員の私事にかかわることも多々あるかと思いますがご容赦ねがいます。ところで、「語る会」も「通信」も、全く、個人的なものとしてスタートいたします。趣旨にご賛同いただける方はお申し出ください。

まずは、第1号をお読み下さい。

(編集委員 橘雄三)

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録」

陳舜臣さん(1924-2015)は、原籍は台湾台北、父の代に日本へ移住、神戸出生です。日本を起点にして、陳さんの渡航歴が増え出すのは、1972年の日中国交回復以降で、ざっと数えて70回を超えるでしょう。そして、それは、陳さんの人生と密着していますので、「台湾・大陸 旅の記録」(編集委員作成)を創刊号に取り上げることは、意味のあることと考えます。

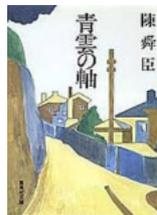
また、旅の記録だけでなく、戦後、1946~49年、初級中学英語教師としての台湾滞在や作家としての大きな賞、江戸川乱歩賞、及び直木賞の受賞、その他、国際政治の出来事も付け加えました。

参考図書は、『青雲の軸』、『道半ば』、『陳舜臣中国ライブラリー30年譜』(集英社)ほかです。

■『青雲の軸』1974年7月発行、旺文社文庫

「青雲の軸」を受験雑誌「蛍雪時代」の1970年10月号から、71年3月号まで連載。「続青雲の軸」を同誌、71年10月号から、72年3月号まで連載。

「一時は『題下手』作家の定評を得たほどだ」「『青雲の軸』というのはわるくない」(『青雲の軸』序章より)



主人公は陳俊仁。玉音放送で終わっている。人生を模索する孤独な魂の遍歴。自伝的青春小説。

■『道半ば』2003年9月発行

集英社「陳舜臣中国ライブラリー」(1999-01年発行)全30巻の月報に連載した「道半ば」が中心。自伝エッセイ。



青地は人生の転機

1924	2月18日、神戸市元町通7丁目で生まれる
あが学ぶ校前に	「小学校にあがる前に、私は二度か三度台湾に帰省したようである」
	「台湾人は這的款」の話(「辛うじて二本の脚で立てるような年齢になっていた」)
	土地(台湾新莊)の人が竹細工用に加工作業中の孟宗竹で、左足の甲をけがした話
	台湾に帰省し、日本語を忘れ、思い出す作戦に「馬方のおっさん」を利用した話
1932	4月、祖父死去。小学三年生になる前の春休み、祖父の法事で台湾へ帰る
1937	中学2年の夏休み、父をのぞく一家で台湾の新莊へほぼ一か月の帰省
1945	8月15日、終戦
	「否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのである。大阪外語は国立だから、その教授、助教授は国家公務員という一面がある。」(『道半ば』)
1946	2月末、呉港から帰国船に乗る。3月初旬、基隆に上陸。弟・本臣が養子に入った本家(父の従弟の家)に身を寄せる。新設、台北県立新莊初級中学の英語の先生にと懇願され、1949年の帰国時まで勤める
	1947
1949	10月、日本に帰る
	12月、国民党政府、首都を南京から台北に移す

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録(続)」 ※西暦年欄の青地は人生の転機を表す

1950 ～ 1958	1950年3月26日結婚。民間貿易が再開され、家業に本格的に取り組むようになる 父の会社での仕事はもっぱら商用文を漢文で書くことで、いわゆる営業活動ではなかった 余暇は読書、翻訳、歴史研究に費やす
1959	娘を寝かしつける際、推理小説を読んで聞かせ、「この程度のものならボクにも書けるな」と夫人に言う と、「なら書いてみなさい」と言われ、作家になる決意を固める
1961 ～ 1969	1961年8月、「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞を受賞。1962年以降、『三色の家』ほか、予想以上に 多くの原稿依頼が舞い込む。1967年、『阿片戦争』を書き下ろす 1969年1月、「青玉獅子香炉」で第六十回直木賞を受賞 この頃はまだ台湾では国民党政府による出版物の検閲が厳しく、台湾派ではなく本土派と目されていた 氏の作品は持ち込めなかった。だが、「青玉獅子香炉」は新聞に掲載された。内容に不快な思いをした という故宮博物院関係者から抗議の文が寄せられたりした
1972	9月29日、日中共同声明（日中国交回復） 10月6日、初めての中国旅行。身分は日本赤十字社に証明してもらって行く。香港、深圳、広州、長 沙、南京、北京、西安（半坡博物館）
1973	8月～9月、家族4人。日中間の空路はまだ開かれていなかったの、香港から入る。西安、蘭州、ウル ムチ、トルファン、ベゼクリフ、酒泉。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。以後、台湾に入れなく なる。「（黄河や揚子江を連想し）まだ見ぬあこがれの祖国の山河」（『青雲の軸』）
1974	9月。香港から深圳、北京、大連、陽泉、延安、西安、乾陵、鄭州、南京、蘇州（虎丘）、揚州、杭州 （銭塘江）、上海へ
1975	8月、家族4人。北京、西安、酒泉から車で敦煌へ。蘭州（甘肅省博物館）、嘉峪関、劉家峡。
1977	7月。ウルムチ、コルラ、クチャ、カシュガルから車でホータン。「シルクロードの旅」取材
1978	夏。南昌市から景德鎮へ（江西省）。「中国やきもの紀行景德鎮」取材
1979	3月。「太平天国」の取材。北京、長沙、桂林、南寧、桂平、広州 9月。NHK「シルクロード」取材で西安へ 10月。「天竺への道」取材。トルファン、クチャ、キジル、大龍池、カシュガル、パミール、タシュク ルガンなど
1980	4月。香港、廈門、福州（崇安）、武夷山、南平、上海、鎮江、揚州（鑑真和上像里帰り）、南京、成 都、樂山、峨眉山、洛陽、龍門、徐州、曲阜。5月泰山へ 8月下旬。NHK「シルクロード」取材・録画。北京、ウルムチ、トルファン、高昌故城、ベゼクリ フ、交河故城
1981	9月末～10月。北京、ウルムチ、南山、イーニン、カシュガル（クルバーン祭）
1984	4月。福建の旅(司馬遼太郎氏らと)。北京、德州、泉州、廈門、西安へ。「中国発掘物語」取材 8月。敦煌へ

◆前ページ、戦後、陳舜臣さんが台北県立新莊初級
中学英語教師としての台湾滞在中の1947年、二・二
八事件が勃発します。この事件は侯孝賢監督の『悲
情城市』の背景として描かれ、日本でもよく知られ
ています。

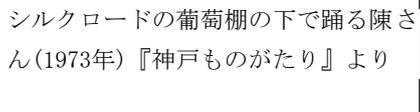
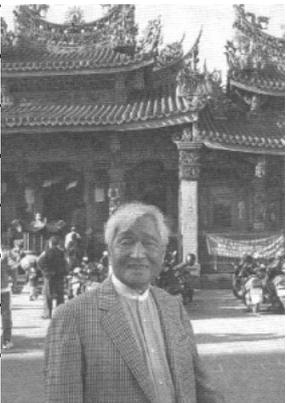
二・二八事件について、陳さんは「ただ銃声を聞
いていたというのは口惜しいことであった。その音
とともに、同胞の命が一つまた一つと消えていくこ
とを、そのとき実感できなかつたことにたいして、
私はいまでも罪悪感をもっている。そのとき、おま
えはどんな気持ちでその音をきいていたのか、と問

われると、一祈りをこめてきいていた。と、答える
しかなかっただろう」（『道半ば』）と記しています。

◆1972年、日中が国交を回復し、陳さんは、待つて
ましたとばかり中国旅行を開始し、翌73年には中華
人民共和国籍を取得します。

陳さんは『青雲の軸』で、1938年7月の神戸大水害
を目の当たりにした主人公俊仁、及びその心の動き
を「俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目
の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。
（こんな色だろうか？）まだ見ぬあこがれの祖国の
山河」と記述しています。

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録(続々)」 ※西暦年欄の青地は人生の転機を表す

1985	10月。林則徐生誕二百年記念シンポジウム。福州、廈門、上海、寧波、舟山列島の普陀山へ。北京から帰国	
1986	10月～11月。上海、浙江の取材。紹興（秋瑾故居）	
1987	4月。「茶事遍路」取材。黄帝陵を参拝。成都、昆明、西双版纳傣（シーサンパンナタイ）族自治州・景洪県へ	
	8月。北京、承德、旅順、大連、天津など	
	12月。上海、福州、泉州、安溪、廈門など	
1988	1月、蔣経国総統死去。副総統李登輝が総統に	
	9月。峨眉山へ	
1989	6月4日、天安門事件	
1990	3月、李登輝、総統選挙で選出される	シルクロードの葡萄棚の下で踊る陳さん(1973年)『神戸ものがたり』より
	10月、日本国籍取得	
	12月4日。台湾へ。41年ぶり	
1991	11月。台湾へ。台北、高雄、花蓮、台東など	
1992	9月。「日中文化・経済」シンポジウムで大連へ。「耶律楚材」の取材で北京	
1993	前年暮れ12月31日、沖縄。1月1日、台湾へ	
	4月。神戸、那覇、台湾・基隆へ（豪華客船「飛鳥」の旅）	
	5月。「耶律楚材」取材。北京、玉泉山へ	
	9月。台北へ。「中華飲食文化」シンポジウム。同市に「舜臣図書室」オープン	
1994	7月。台湾へ	
	8月10日。宝塚歌劇80周年記念行事の講演中に舞台上で倒れ（脳内出血）入院	
1995	1月13日、5ヶ月の闘病をおえ退院。4日後の17日、大震災	台湾のゆかりの地を訪れた陳さん(2004年11月)『神戸ものがたり』より
	10月。台湾へ	
1996	4月。中国へ。敦煌にも	
	9月。台湾へ	
1997	3月。北京、杭州、広州、香港（テレビ朝日の取材）	
	10月～11月。台北、香港へ	
1998	5月。上海、台北	
1999	7月。「桃源郷」取材。中国・雲南省へ	
2000	3月。台北。結婚五十年を祝う会	
2002	2月。沖縄（全日空シンポ、PHP取材）、台湾、博多（NHK取材）	
2003	1月。台北へ	
	3月。香港、台北、台南へ	

◆前ページ、1972年の中国旅行のとき、陳さんは北京で、「1950年代に祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、北京放送で放送記者をしていた妹の妙齡」（『陳舜臣中国ライブラリー30年譜』）に会っています。陳家は、“わからないくらい昔”、福建省泉州から台湾に移住したといひます。それなのにどうして、陳さんそして妹さんの心にある祖国は、台湾ではなく大陸だったのでしょうか。

◆それからもう一つ、1972、73、74、75年と毎年北京へ行っています。ところで、エッセーなど、文化大革命について書いた陳さんの作品を私（橘）は、寡聞にして、知りません。

◆台湾では、1988年に蔣経国総統が死去し、李登輝総統の時代となります。逆に、大陸では1989年天安門事件が起こります。このような政治状況の変化が陳さんの日本国籍取得に影響したと思われます。

